

# 第6回　日本の祭シンポジウム

平成30年9月15日（土）

## 報告書

### 第一部 基調講演

日本の祭と神賑（かみにぎわい）

玲月流初代篠笛奏者

森田 玲

### 第二部 パネルディスカッション

#### 祭の学生参加

パネリスト

八木透（佛教大学歴史学部教授）

鈴木泰輔（岐阜県立吉城高校キャリア推進部長）

コーディネーター

石田芳弘（伊達コミュニケーション研究所所長）

#### 会場

ルプラ王山 飛翔

#### 主催

学校法人至学館伊達コミュニケーション研究所  
あいち山車まつり日本一協議会

#### 後援

全国山・鉢・屋台連合会  
コミュニティ政策学会  
NHK名古屋放送局  
中日新聞



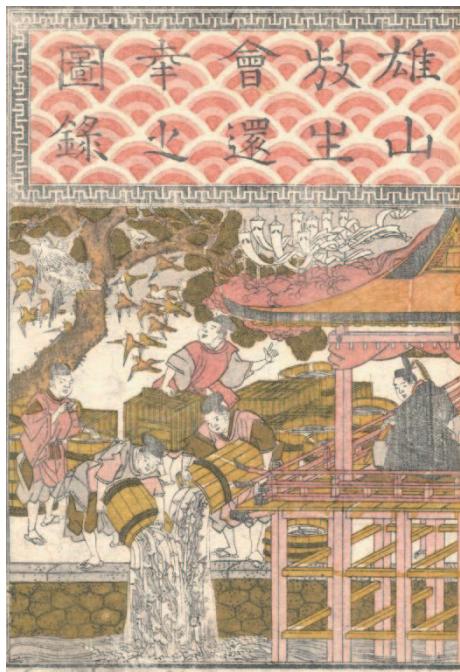
皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました玲月流篠笛奏者の森田玲と申します。本日はちょっと時間がないので早口で喋りますけれども、どうぞよろしくお願ひいたします。

今日は何の日か、皆さんご存じですか。あるお祭関係者の方にとっては、とても大事な日です。おそらく本日は祭関係者の方がほとんどだと思うのですが、八幡神系の、八幡さんがお祀りされている神社関係者の方はいないと思います。今日は9

月15日、旧暦ですと8月15日、本日は八幡さんの縁日でございます。ですから、八幡神系のお祭は今日になりますので、とてもこのシンポジウムに参加できないという事になります。

本日は岸和田祭の日でもあります。岸和田祭の主催は、<sup>きしき</sup>岸城神社という岸和田城下の産土神社になりますが、こちらには天照皇大神、素盞鳴尊、そして八幡さんがお祀りされております。縁日が幾つかございますけれども、その中の八幡さんの日取りで地車が出る祭がなされているという事になります。

冒頭で一曲笛を吹きましたが、これは伊勢大神楽の馬鹿囃子という曲でございます。伊勢大神楽の方たちは、三重県の桑名を拠点に、西日本の各地を回って、江戸時代には伊勢神宮の、現在は伊勢大神楽の神札を配っております。この曲は、他の色々な祭に採り入れられております。例えば明治の中期ごろに、大阪の天神祭や生玉祭にこの曲が入りまして、現在では大阪の人たちは、この曲は大阪の夏祭の笛の旋律だと思っています。さらに面白いのは、昭和30年くらいなのですが、朝比奈隆さんという指揮者の方がいらっしゃいました。ドイツに招聘される時に、何か日本らしいオーケストラをやってくれと言われました。日本らしいオーケストラといっても、雅楽を連れていく訳にもいきません。そこで、生玉神社（生國魂神社）の島之内という氏地に住まわれていた大栗裕さんという方に相談したのです。すると、日本らしいというと、やはり祭だろうという事で、その生玉さんで吹かれていた獅子舞の笛の旋律をピッコロで入れる事になりました。ですから、全国の中学高校のブラスバンドでもこの曲を知っている子供たちが多いのですね。ですけれども、元を辿れば、伊勢大神楽の獅子舞の曲という事になります。



私は、このような篠笛を演奏したり、教えたり、売ったり、会社では作ったりとやっております。この篠笛というのは、祭の中でも、今日覚えていただきたいキーワードなのですが、神賑かみにぎわいという局面で使われる竹の横笛でございます。皆さんも、地元のお祭で使われている方が多いと思うのですが、篠笛を扱うにあたっては、やはり祭の本質を知っておかないと責任を持って笛を売れないという思いもあって、祭の研究もしているという訳でございます。

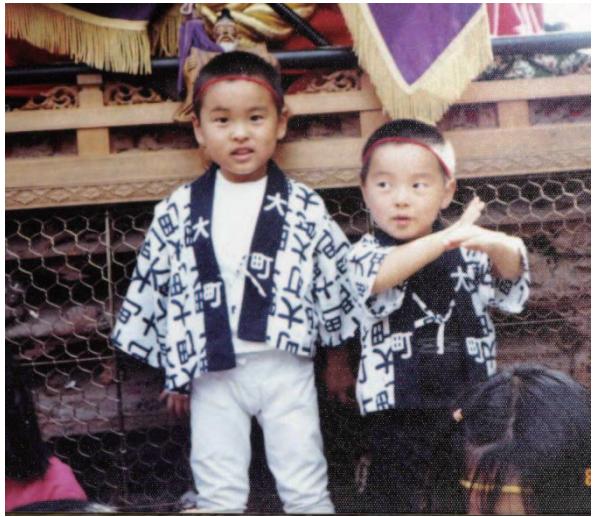
八幡さんのお祭の話に戻りますと、旧暦の8月15日は、放生会ほうじょうえという仏教的な法事がおこなわれました。我々は様々な生き物の命を頂いて生かされております

ので、命に感謝といいますか、そういうものを供養するお祭でございます。特に8月15日である必要はないのですが、今からもう千年以上も前に、宇佐の八幡さんが8月15日に始めて、そこから石清水八幡宮にまいりましても、鶴岡八幡宮にまいりましても、8月15日、中秋の日は、八幡さんのお祭という事になっております。

明治になりました改暦の時に、日取りをそのまま8月15日にするのか、月遅れの9月15日にするのかで議論がございましたが、1ヶ月ずらした方が、目にちは変わりますが、季節感が合ってきます。ですから、今では、多くは9月15日に八幡さんのお祭をされている所が多いのです。これは、石清水八幡宮の放生会の様子でございます。

これは、私の育った地車（だんじり）です。山鉾屋台という枠組みに含まれるかと思いますが、この地車は、川御座船かわござぶねという、江戸時代に幕府あるいは西国大名が参勤交代や朝鮮通信使、琉球使節の送迎の際に、大阪から京都の淀あるいは伏見辺りまで利用した豪華絢爛の客船がございまして、その胴体部分を取り除いたものが地車の原型でございます。





私は岸和田の城下町ではなくて、少し山側にある、岸和田市内の八木<sup>やぎ</sup>という地域の地車で育ちました。これが、私が4歳の時の写真だと思うのですが、今ではこんな風に育ちました(笑)。愛知県にも彫刻で素晴らしいものが多いと思うのですが、岸和田や岸和田周辺地域でも彫刻がなされます。岸和田型の地車には江戸時代のものがなくて、ほとんど明治、大正、あるいは昭和、平成の地車でございます。やはり曳き方

が荒いので、その分、傷みが早いのでしょうか。私が幼少の頃から見ていました彫り物に天岩戸開きがございます。あめのう やまめのみこと天宇受賣命が岩戸の前で神懸かりして神樂を舞う場面でございます。その左の方に、笛を吹いている方がいらっしゃいます。子供心に、笛というのは地車に乗って吹くものなのに、変な所で吹いているなあ、と思って見ておりました。この彫刻が、私が笛吹きになった遠因だと思っております。

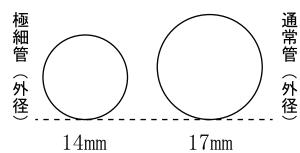
私は母の地元の地車を曳いて育ったのですが、母は、結婚して、隣の町で私を生んでいます。隣の町でも地車はあるのですが、私の母は、そこの地車は地車じゃない的なこと言って、自分の生まれた地域の地車を私に曳かせたのです。そうなるとどうなるかと言うと、小学校くらいまではまだいいのですが、中学高校になると、だんだん友達がいないことが気になってまいります。けれども地車はめちゃめちゃ好きな訳で、そこで私は精神的に病む訳です。それで結局、青年団には入らず、「祭難民」になってしまって、そのアイデンティティー・クライシスを克服するために、今に至るまで祭に関わる仕事をしているという次第です(笑)。

そして、京都の大学に行って、7、8年ほど祭から離れていたのですが、やはり祭の事が忘れられずに、ふと祭を見に行った年がございました。すると、自分の記憶にある笛のメロディーが全く鳴っていない。地車には笛を吹く鳴物係が乗り込みます。そして美しい旋律が奏でられるはずなのですが、全然笛が吹かれていません。地車が動き出すと、笛を吹かずに手を持って、「行け行け！」と笛を振っているのです。これは違うぞ、と。物凄くショックを受け



ました。やはり、当時は祭から離れていたにもかかわらず、やはり祭が、地車が私のアイデ  
ンティティーになっていたのですね。

これは何とかしないと  
いけないという事で、私  
がまだ22、3歳の頃でし  
たが、笛が鳴っていない  
原因を探りました。これ  
が普通の笛です。そして、  
これが、当時使われてい  
た笛。とても細い笛にな  
っていましたのです。細い笛  
は、基本の一音は簡単に



鳴るのですが、指の運指によっては音が裏返ってまったく音が出ません。吹き手ではなく楽  
器が問題だと気付きました、私は農学部だったのですが、大学にいる場合じゃないと思って  
中退して笛屋を始めた、というのが私の笛人生の始まりです。

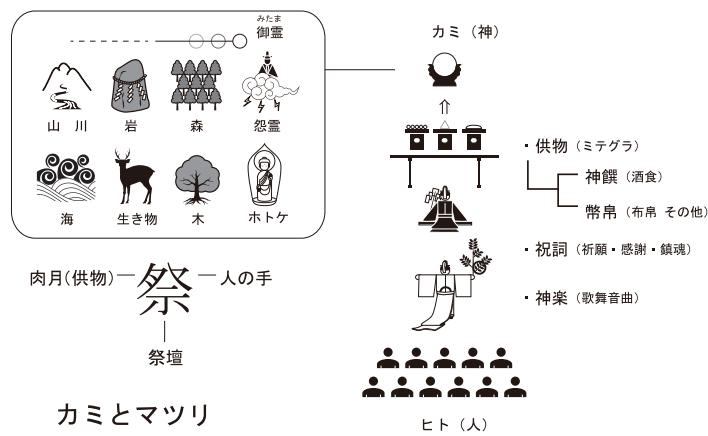
その後、笛の問題は改善に向かっていくのですが、平成18年から岸和田祭が土日開催にな  
っていました。祭を土日開催にするのかどうするのか、これは皆さん議論のある所だと思  
いますが。笛やお囃子がとても上手い、けれども日にちは土日の岸和田祭。あるいは、笛  
は下手だけども、ちゃんと9月の式日におこなわれる岸和田祭。どちらが素晴らしい、意味  
があるかを考えた時に、今度は笛だけやっている場合ではないと。この頃から、祭の本質と  
は何かを考え始めるようになりました。今まで地車ばかり見ていましたけれども、先ほど笛を  
吹いた獅子舞、伊勢大神楽ですか、祇園祭や天神祭など、他の地域の祭にも興味が持てる  
ようになりました。そして、祭の根源を探っていくと、祭とはカミとヒト、カミとは自然と  
言い換えても良いと思いますが、そういったものとの対話であると気付きました。そして、  
辞めてしまった京大の農学部に、人と自然との関わりだとか、あるいは命とか、食べ物とか、  
色々と学ぶ事があるのではないか、祭を考える上でのヒントが散りばめられているのではないか、  
これはやはり大学に戻って学ばねばならないと思ったのです。ご縁があって、三十代  
半ばでしたが京大に再入学させていただき、農学部で勉強し卒業いたしました。



そろそろ本題です。今日は時間が無いので、お話しする事が限られています。お手元にレジュメがございます。本日お話しする内容はそちらに詳しく書いておりますので、後でご活用いただければと思います。

まず、このシンポジウムがなぜおこなわれているか。関係者の皆さまのご挨拶にもありましたように、まず危機感がある訳ですね。そして、危機感と同時に、この祭というものによって何かコミュニティなり日本の文化なりを良い形で再生・継承できるのではないかという期待感がある。そのための祭談義を進めていきたい訳ですが、まず共通した概念や基本事項がないと、対話にならない。

ですから、そういった一つ一つの単語や概念や色々な事例を共有していきたい、そういった思いで『日本の祭と神賀』という本を2、3年前に創元社から出版いただきました。私も、元々は祭と言えば地車しか知らないという状態だったのですが、やはり色々な祭を見て歩くと、共通点があるうえに多様性がある。その共通点が何かという所を押さえた方が、祭の話は楽しくなるし、発展性がございます。そこで、皆さんもご存じの部分も多いと思いますが、祭の基本からお話ししていきたいと思います。



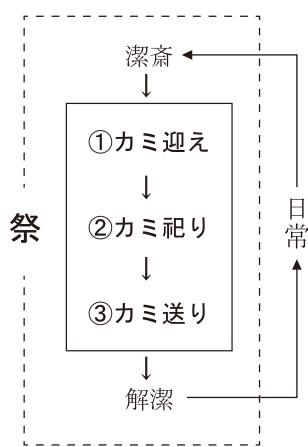
まず、祭とは何かという事なのですが、左の図をご覧ください。日本人にとってカミ様は一神教の絶対神みたいな存在ではなくて、自然そのものであつたり、それに依り憑く御靈であるとか、そういった人智を超えた尊いもの、畏れ多いものをカミと捉えてまいりました。

今我々が、このシンポジウムでお話していくカミというのは、神社に鎮まっているカミ様であるという事になると思います。現在では、氏地をお守りくださるカミ様、という解釈で良いと思います。この、カミを奉る行為が祭です。神饌・酒食といった供物を奉る、それから祝詞によって祈願なり感謝なりあるいは鎮魂の願いを込めて言葉に出して表す。そして、神

樂と申しますが、笛や太鼓やその他樂器と舞を伴いまして、カミ様に歌舞音曲を披露する。このようにカミ様を奉る、カミ様にまつらう行為が祭でございます。これが、祭の一番の根源であると思いますし、色々な祭に発展していくても、核には必ずこういった祭のカタチが残っています。

今申し上げたのが、カミと祭の概略なのですが、色々な地域の祭を見に行って、獅子舞が出た、地車が出た、山車が出た、太鼓がやって来た、あるいは、格好良かった、凄かった、莊嚴であった、といった感慨だけで終わってしまうと、中々そこから自分の知っている祭と対比させて物事を考える事が難しい。そこで、今日はまず、あらゆる祭に共通する祭の構造を覚えていただきたいと思います。

カミ送り	カミ祀り	カミ迎え	
左義長焼き	トンド焼き	正月餅	門松 年神
精靈流し	送り鍾馗	盆踊り	迎え火 祖靈
神輿を遷却	御靈会	神輿鉾	惡靈
田 山	家	田	田神



祭の三部構成

祭には、必ず①「カミ迎え」、②「カミ祀り」、③「カミ送り」という三つの段階がございます。祭によつては、①と③が簡略されている場合もありますが、②が省略される事はないと思います。まず①のカミ迎えで、神様をお迎えする訳です。今は一般的にカミ様は一年を通して神社に鎮まっていることが多いですが、古くは、人々が住んでいる所よりも遠い所、山の上とか海の彼方とか、あるいは天から、遠い所から来られて、年に一度、あるいは臨時に、特別な場面にカミ様がいらっしゃる、という考え方をございました。祭の日には、神社の本殿の御扉みとびらを開きます。普段は閉まっているのですが、祭の時だけ神主さんが奥の方に参って、御扉を開く訳ですね。これが、カミ迎えに対応します。そして、カミを迎えて、先ほど申し上げたような、食べ物や色々な芸能でカミ様をお祀りする。そして、佳境を迎えて後、カミ様に帰っていただくという事になります。

この①、②、③の前段階には、体を清めて祭の準備を整える潔斎の儀式がございます。そして祭が終わった後は日常の精神状態に戻らなければならないので、潔斎と対をなす解斎の儀式がございます。愛知県ではどのような言葉で表されているのか分からぬのですが、例えば関西ではラクサク、京都では足洗いと言いまして、今ではドンチャン騒ぎの打ち上げ状

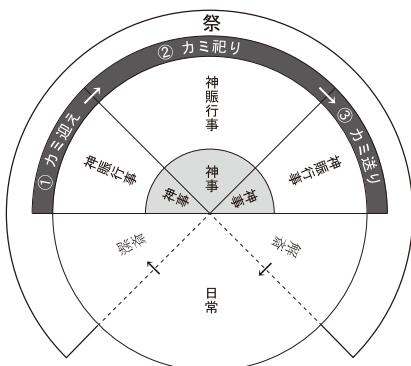
態のことともございますが、これは、興奮した祭の精神状態から落ち着いた日常の精神状態へ戻す大切な儀式でございます。祭は、このカミ迎え、カミ祀り、カミ送りの三部で構成されており、これを基本に色々な祭を見ていただくと、祭の構造が見えやすくなるのではないかと思います。

この三部構成は、神社以外のお祭にも当てはまります。例えば、お正月の年神様は、門松のようないものを目印にカミ迎えをして、そして鏡餅に神様を寄り付かせる。あるいは、鏡餅が年神様への供物になる。それから、これは小正月の時期になると思うのですが、とんど焼き、左義長といった行事でお焚き上げをして、カミ様に帰っていただく。お盆の行事も然り。ご先祖様の祖靈神を、迎え火などでお迎えして、そして盆棚というもので奉る、饗應する。盆踊りも、捉え方は様々なのですが、概してカミ祀りと言えるでしょう。そして京都ですと、五山の送り火、送り鐘などがございますけれども、精靈流しというのも全国各地にございます。これでカミ送りをする、という事になります。また、田んぼの田神や稻のカミ様は、田んぼから家へ、家から田んぼへ行ったり、あるいは山から田んぼ、田んぼから山へ行ったりと、色々な考え方はあると思うのですが、同じような振る舞いとなります。

津島の天王祭の場合を申し上げると、都市部には悪霊を退散したいという願いがある訳です。人口が密集しておりますと、色々な疫病などが発生しやすい。そういうものを鉢や神輿に乗せて、御靈会という、これも仏教的な法要なのですが、これを営んで、その鉢なり神輿なりを遷却する、流し去るという事をやったりします。これはカミ送りに重点が置かれる祭です。

このように、神社の祭も含めて色々な祭を考える時に、これはカミ迎えなのか、カミ祀りなのか、カミ送りなのか、という事を考えていただくと、理解が一層深まるかと思います。

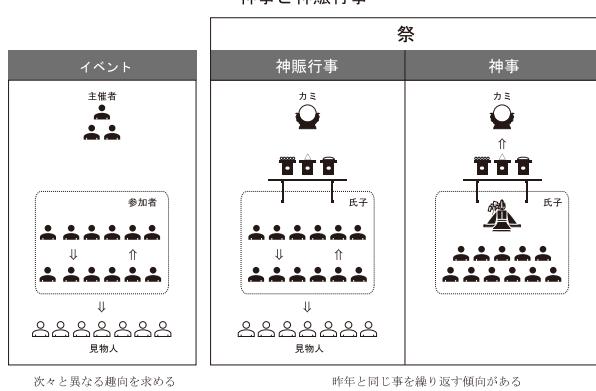
次に「神賑」という概念を紹介したいと思います。この言葉自体は、私の知る範囲では、江戸時代には見られませんが、もちろん、概念としては先史時代からございます。祭を漠然と「かみさまごと」と捉えるのではなく、「祭」を「神事」と「神賑行事」という二つの局面で捉える訳ですね。先ほどの、カミ迎え・カミ祀り・カミ送りとは別次元の話です。愛知県の曳車に関して言いますと、こちらはほぼ神賑行事に含まれるはずです。神事と神賑の何が違うかという事なのですが、まず、祭の中で人々の意識がカミ様に向いている場面、これが神事です。これは理解いただけると思います。先ほど、祭とは何かというお話をしましたが、神社の奥の方で神主さんや町や村の代表の方々が参列する例祭などは、もちろん神事でありますし、例えば神輿にはカミ様の御分靈がお遷りになられていますので、例えば京都の神輿



祭の基本構造（三部構成 × 神事・神賑行事）

の二つのバランスが非常に大切です。神賑行事というのは非常に面白いものです。強い中毒性があります。個人で楽しむのではなくて、集団で、それも気心の知れた仲間と楽しむ。何世代にもわたって受け継がれてきた祭というのは、常軌を逸した喜びです。神賑行事は、ともすれば暴走志向にありますが、これに対してブレーキをかけるのは、例祭であったり、神輿の渡御といった神事です。先ほど、岸和田祭の話をいたしましたけれども、岸和田祭では残念ながらこの神事の存在感が希薄です。一般に岸和田祭は凄い、という印象を受けるのは、神事に重きが置かれずに神賑が暴走しているからであって、それは、語弊を恐れずに言うと、ある意味、祭の中でのルール違反だと私は思っています。毎年のように怪我人が出たり、時には死人が出ていますが、果たして死人の出る祭が祭であって良いのか。死の穢れというのが一番問題ですから。今、岸和田には神輿がございません。神輿を新たに造るとか、何か神社のカミ様に対して意識が向く場面というものを意識的に作っていかないと、私は強く感じています。

### 神事と神賑行事



ヒトの意識の方向による神事と神賑行事の概念 ヒトの意識がカミに向いている場合は神事。カミの存在を前提としながらも、ヒトの意識がヒト同士（氏子・崇敬者同士や見物人）に向いている場合は神賑行事とする。

皆さんの祭には、例祭、神輿といった神事があると思うのですが、それを本当に大切にしていただきたい。そのような神事をしっかりとおこなった上で、神賑を目一杯楽しむ、というのが祭の理想的なカタチではないかと思うのです。

そして補足ですが、図の一番左です。カミ様の代わりにヒトによる主催者がいますと、イベントになります。先ほどの

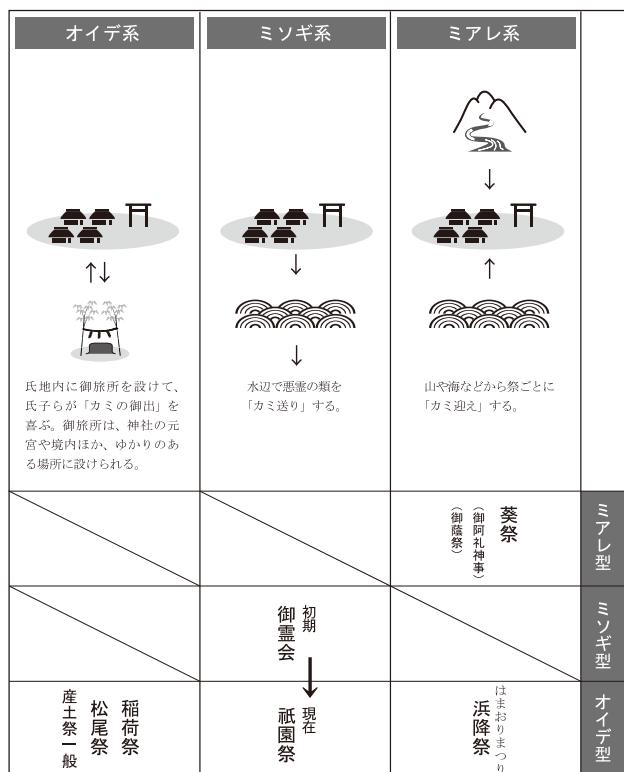
谷岡学長のお話にもございました「よさこいソーラン」などは、これにあたります。ヒトの意識の在り方が神賑行事と似ており、和風の衣装などを着ていますと、いかにも祭っぽいのですが、「祭」と「よさこいソーラン」との違いは、カミの存在の有無にあることは、この図を見ていただければ明らかだと思います。

神事、あるいは神賑行事によっては、「神事のような神賑」や、「神賑のような神事」がある、必ずしも明確に分けることができるとは限らないのですが、これは神事なのか神賑なのかと考えていただく事は、祭の本質に迫るために非常に有効な事だと思うので、本日は、神賑行事という言葉を覚えていただけましたらと思います。

先ほどの、祭の三部構成と、神事と神賑行事とを組み合わせますと、このような図になります。カミ迎え、カミ祀り、カミ送りの核にあるのは神事なのですが、地域によって、カミ迎えの場面が神賑行事に発達する所もあれば、カミ祀りの場面が神賑行事に発達する所もありますし、カミ送りの場面が神賑行事に発達する所もあります。自分たちの神賑の出自はどこにあるのかという事を考えると、色々と祭の歴史などが分かってきますので、よろしければこの図も覚えていただけましたらと思います。

次に、神事の部分を深く掘り下げてみたいと思うのですが、カミ様は動くからこそ、その存在を感じることができます。ずっと同じ所にいるのではなくて、いない所から来るとか、いらっしゃった場所から動くから人の目に触れる訳ですけれども、実はそのカミ様の動き、神幸祭には3つのパターンがあります。ミアレ型、ミソギ型、オイデ型、この3つを覚えていただきたいと思います。ミアレというのは、御、現れる、普段はいらっしゃらないカミ様が祭の時に現れる、というパターンですね。ミソギ型は、禊ぎ、ですから、皆さんのが神社に参る時に手水

神幸祭の出自（系）と目的（型）



舎で手を清めるのと一緒にですね。悪霊の類、これもカミ様ですが、この悪霊の類を流し去る。これがミソギ型です。オイデ型というのは、今よく一般的に見られるかたちです。神社にいらしたカミ様が、神輿などに乗って、氏地を巡って氏子一般の参拝を得るというパターンになります。

例えば愛知県では、潮干祭などは、曳車が海に入っていますけれども、神輿が海に入るのが原義だと思います。同様に、天王祭も潮干祭と同じ様に水辺に行く。しかし、水辺に行く意味合いが、両者ではまた違うと思います。例えば、潮干祭の神前神社には、神武天皇が浜辺に辿り着かれたという由緒がございますけれども、その故事を再現していると考えられます。つまり、神様がミアレした場所、現れた海辺に神輿や曳車を持って行って、そこから神社に向かう。これは、ミアレ型の神幸祭の系列になります。天王祭、須成祭の方では、今は神輿が行って帰ってといった感じですが、元々の形は悪霊や厄害を集めた葦を流し去るという、ミソギ型の神幸祭になると思います。犬山祭などは、城下町を廻って、城下町の人々と交歓するという形なので、オイデ型という事になると思います。カミ様の動きには、その意味の上から、これら3系統があるという事を覚えておいてください。

そして、例えば、今の天王祭もそうですし、京都の祇園祭もそうなのですが、現在はオイデ型ですが、元々はミソギ型の祭だったものがあります。これは、怨霊、悪霊の類を繰り返しお祀りしていると、段々とこの地域を守ってくれる産土神に変わっていくのです。現在では、祇園祭もわざわざ神輿を流したりはしません。昔の、神泉苑という池で祭をおこなっていた頃の祇園祭や、あるいは舟岡山という京都の中心線を決めた山の上でおこなっていた御靈会では、神輿に悪霊を乗せて流し去るという事をやっておりました。難波の海、大阪湾に悪霊を流したのです。そんだけったいなカミ様を流されて、大阪の人もたまたものではありませんが、ところが面白いのは、その悪霊のカミ様を、迎えた側は今度はミアレ型の祭をおこなうのです。例えば、恵比寿神として祀るのです。これは、愛知県の天王祭でも考えられる事例だと思います。カミ送りされたカミが流れ着いた所で、カミ迎えされて祀られるというパターンですね。

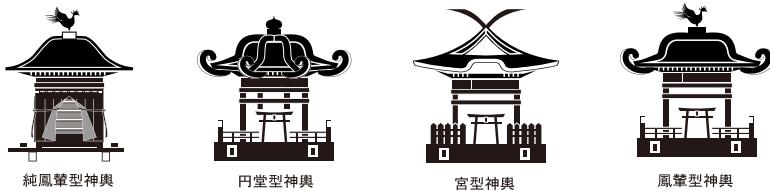
神輿などによるカミ様の動きに合わせて皆が楽しんで、色々な踊りをしたり、宴会をしたり、そこからどんどん、いわゆる山車や曳車の類が発達していく訳ですが、まずこういったカミ様の動きが祭の中心にあるという事を確認しておきたいと思います。

神輿の種類と来歴に関する  
して少し触れておきたい  
と思います。お手元の資料に書いてありますが、  
神輿の来歴は一様ではなくて、形式によってその  
出自が異なります。

一番よく見られるのが、

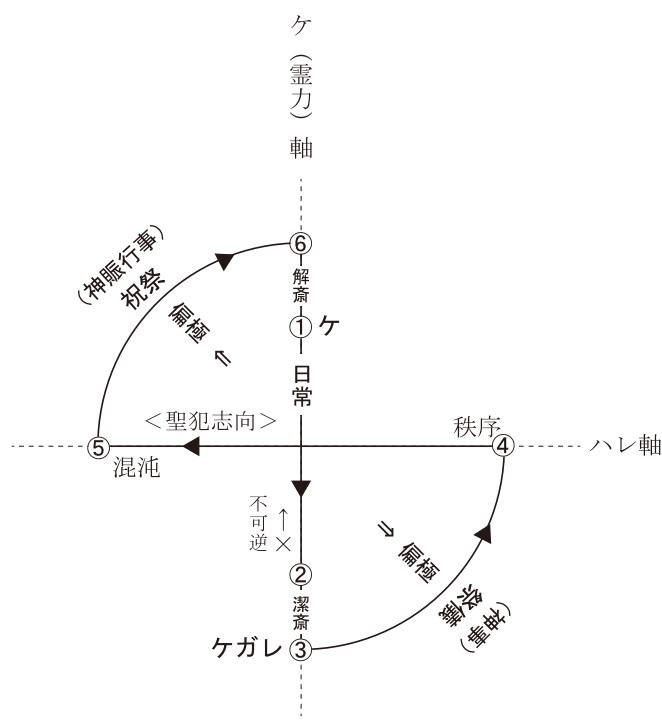
右側の鳳輦型の神輿。これは天皇が乗られる鳳輦を模したもので、八幡神系の神社がその始まりです。今は八幡社以外でも使われますけれども、元々は奈良時代の東大寺の大仏の開眼会の時に、鳳輦に類似の輿が宇佐八幡宮の巫女、すなわち宇佐のカミ様の乗物として用いられたのが初見です。後に仏教の莊嚴具と習合して、今よく見る金ピカの神輿に変化していきました。次に、京都を中心に見られる、お社の形、宮型の神輿というのもございます。また、円堂型神輿というのは、四角形ではなくて、六角形と八角形の、寺院の円堂を模したような雰囲気の神輿もございます。これは、何柱かのカミ様がいらっしゃった時に、あるカミ様が主祭神である、特別であるという事をわかりやすくするために、見た目の雰囲気を変えるための視覚効果として用いられることが多いです。そして、純鳳輦型神輿。これは明治に入ってからの登場です。平安神宮の時代祭という祭がありまして、そこでは、桓武天皇と、平安京最後の天皇でいらっしゃる孝明天皇の御靈みたまが祀られておられます。そのように、目に見えて天皇様が祀られているという事で、やはり王政復古の時代背景もあったのでしょうけども、本来の鳳輦の様式に立ち返りました。そして、これが全国に広がったのです。元々の神輿に加えて、この御鳳輦というものが導入されると、いつの間にか元の金ピカの神輿よりも格が高いという事になってしまいました。こういった所も調べてみると楽しいかもしないですね。

ここから話が少し変わってまいります。前回のシンポジウムで、秩父神社の菌田稔宮司様が、私の事を紹介してくださったことがきっかけで今回こちらに立たせていただいている次第です。その、菌田先生による、共同体における祭の役割を示した非常に分かりやすい図がございます。その原図に私なりに少し書き加えてみました。1ヶ月ほど前に菌田先生の所、



純鳳輦型神輿	円堂型神輿	宮型神輿	鳳輦型神輿
明治・平安神宮の創設 桓武天皇・孝明天皇の御靈 既存の神輿より格式が高く 感じられる	寺院の円堂がモデル? 祭神の差別化	神社の社殿がモデル 京都の古社に見られる 後に仏教的莊嚴具	天皇の鳳輦がモデル 東大寺大仏開眼会 八幡神系 仏教的莊嚴具

秩父神社に参りまして、この図に問題ないとお墨付きをいただきましたので、この図を元に話を進めて参りたいと思います。



祭（神事・神賑行事）による  
「ケ（靈力）離れ・離れ」からの回復  
<蘭田稔『祭の現象学』の掲載図を基に森田が作図>

日常の状態（ケ）である①から、時間が経つにつれて②へと、我々個人や地域の元気、活力といったものが下がってまいります（ケ枯れ）。それをどうやって日常の①に戻そうかという時に、普通のやり方では元の状態に戻らないのです。しんどいから一日か二日寝ておこうかとか、そういういった事では活力は戻らない。裏技を使わなければいけないです。縦軸が時間軸ですが、裏技というのは、これとは異なる次元、横軸を使うことになります。日本人が考えた裏技というのは、その場所の環境や人の精神状態というものを、日常とは異なるハレの次元に持つて行くこと。これが祭なのですね。

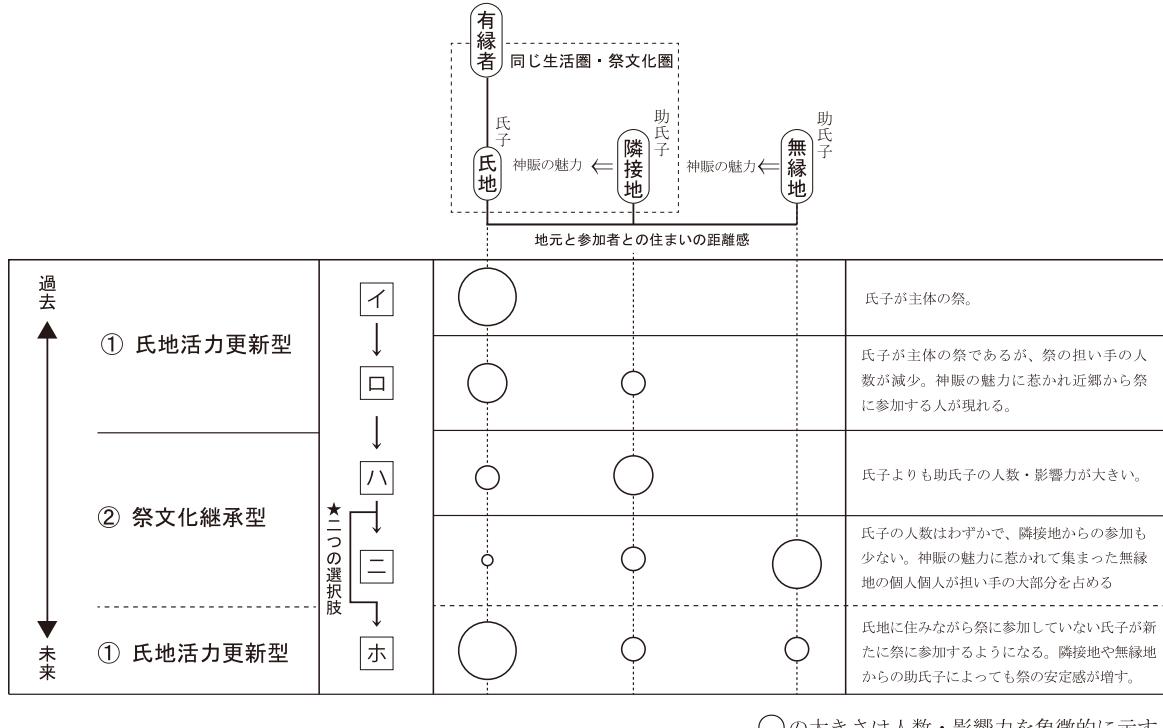
②から③は積極的にケを衰退させる、ケ枯れの状態を推し進めて、潔斎とします。③から④は、カミ様に対して真摯に向き合う場面、神事ですね。ここに「偏極」と書いてありますけれども、日常の作法を極端に厳粛かつ慎重におこなうということです。例えば食べ物を作る時には、日常ではおこなわない贅沢な材料で手間暇をかけたり、別火で調理するなど、かなり極端な行事をおこないます。ただし、このような厳粛な神事だけでは、①に戻ることができません。ではどうするかというと、ここに聖犯指向とあります。タブーを犯す、日頃我々が抑圧している事をやってしまう訳です。お酒をたくさん飲んだり、時には喧嘩に発展したりと、精神を思い切り解放する。そうやって混沌の方に向っていく、これが神賑行事です。神事とは対局にあたる「偏極」です。お金のかけ方もそうです。曳車、彫物もそうですが、ああいう事には個人ではお金をかけないですよね。しかしそれを目一杯やるのです。神事と神賑行事、両極端な行為をともなって、ようやく日常の①に戻り得るのです。最後に、このままだとテンションが高過ぎるので、解斎をする訳ですね。足洗い、ラクサクです（笑）。

そして⑥から日常の①に戻る。この①に戻る事が重要なのです。これが、祭の隠れたシステム、真の目的なのです。

この図は一見わかりづらいところもございますが、一旦理解すると非常に有効です。未来的の祭の在り方を考える際に、大きなヒントになる図だと思いますので、是非ご活用いただければと思います。

最後に、本日はこの後、パネルディスカッションで「祭の学生参加」という話に繋がるようすで、そちらに話を持っていきたいと思います。これは私の考えなのですが、図は、祭が持つ氏地の活力の更新力、氏地が持っている生命力のようなものが、時代とともに、イ→ロ→ハと下がっていってしまっている様子を表しています。それを、先ほどの図と同じように、ホに戻したい訳ですが、例えば、二つ選択肢があります。もちろん両方選んでも良い訳ですが、一つは、祭というのは基本的に氏子のものですが、氏子以外の参加者を入れるかどうか。もう一つは、氏子内の参加者を充実させるかどうか。つまり、祭を離れた氏子、祭をやりたいけど祭を離れてしまったような人たち、いわゆる「祭難民」の復帰、あるいは、新興の引っ越してきた人たちですね、この人たちも氏子です。この新興の人たちの参加。それから、もちろん議論のある所だとは思いますが、年齢や、性別や、家柄などによる祭の役割分担を今一度見直してみる。それによって参加できる人も増えるかもしれない。後者の選択をした場合でも、氏子以外の参加者の助けがいる場面ももちろんあると思うのですが、それだけだとホからイには戻らないのです。氏地内の住人の参加という事も同時に考えていかなければいけないのではないかというのが、私の思っている所でございます。

イ→ロ→ハ→二→ホとして、過去から未来への時間軸が縦にございます。そして、図の方に、担い手の属性を記しています。一番左側に「氏地ー有縁者」とありますが、これは、地元の氏地の人たち、あるいは実家がそこにあるけれども、隣の町に住んでいるというような有縁者。そして隣接地、これはちょっと離れた隣町であるとか、同じ生活圏において、同じパターンの祭を伝承しているようなケースです。例えば獅子舞がない祭の地域で獅子舞の話をしても仕方がないですし、この名古屋で岸和田の話をしても全然通じないとと思うのですが、生活圏が近いと似たような系統の祭があって、祭の事で何か話が合う、という感じになる訳ですね。このような人たちの属性を、隣接地と呼んでいます。そして、次に無縁地。物凄く遠い人たちです。S N Sとかインターネットを使って、祭に参加しませんか、と呼びかける類のものです。例えば、昔からある神輿会というものがございます。私は全容を理解できてはいないのですが、「あの人、この前の祭でも見た」という様な事が多々ございます。氏地をまたいで、祭をハシゴして、神輿を皆で舁きにいく訳です。このようなパターンが無縁



○の大きさは人数・影響力を象徴的に示す。

#### 担い手の属性からみた祭の意義（試案） 森田玲 2018

表は、ある町場で育まれた祭の文化が周辺地域に伝播し、その町場を中心に一定の共通した祭文化圏を形成している地域を想定して、過去、現在、未来の担い手の変化を示したものである。

「祭」の未来を考える時、「祭文化」を残すことを主目的とするのか、あるいは、「祭」の前提となる共同体の再構築・活性化を主目的とするのかによって、探るべき方法は異なってくる。

祭の担い手の出自を「氏地」「隣接地」「無縁地」の三つに分けた時、その構成によって、祭は①【氏地活力更新型】と②【祭文化継承型】の二つに分けることができる。

地の人たちです。

イというのが一番の元の形です。氏地の人たちが、全員祭に参加する。これは完全に、氏地の活力更新型の祭です。先ほどの蘭田先生の図を元に作成したケとハレの図が完全に当てはまります。そこで祭をすれば、地域の氏地の活力が元に戻る。次に、ロの状態に移りますと、氏子の主体の祭ではありますけれども、担い手の人たちが少し減少している。そうなると、人手がちょっと足りないという事で、誰か手伝いに来てほしいと友達に声をかけるなど、口づてで人が集まってくる訳です。その場合は、少し隣接地の人が増えてきます。このロのパターンというのは、今でも多いかと思います。

次のハの段階になりますと、この場合は氏子よりも助氏子の人数や影響の方が大きくなるのです。私は隣接地の氏子の事を助氏子と仮に名前を付けていますけど、こうなってくると、祭の意義は、地元の活力を更新するためというよりも、今まで培ってきた祭文化、地車であったり曳車であったり神輿であったりする訳ですが、そのような有形物をどうやって維持し

ようかと、皆の頭がそちらの方にシフトしている。そうなると、氏地の活性がどうのこうのという話ではなくなってくるのです。それが、ハの状態です。現在の岸和田祭はこの段階で、ある町の青年団が 100 人いるとしますと、地元の若者が 10 人、20 人という場合もございます。

その次の段階として、今、我々には、ハからニを目指すのか、ハ→ホを目指すのか、二つの選択肢があると思います。ハ→ニの場合だと、担い手の減ってしまった祭をこれからどうしようかという時に、無縁地の人たちを呼ぶというパターンです。地元に祭がなくて、日本人なのに祭を知らない、あるいはもっと日本らしい行事に関わりたい、という人は全国各地にいるはずです。そういう人たちに対して、「この祭に参加できますよ」という呼びかけをすれば、かなり集まるような事があると思います。こういう状況が今あるかどうか分かりませんので、物を考えるためのたたき台としての想定ですが、地元の人数はどんどん減って、隣接地の人数もどんどん減っている。そして、遠くの祭好きな人たちが集まって、ほとんどが無縁地の人々という状態が想定できるのではないかでしょうか。このニの状態では、有形のものとしての祭を維持していく上では有効かもしれないけれども、最終的には、イのような氏地活力更新型の祭に元に戻る可能性はなくなってしまいます。

ここで、改めて考え直してみたいことは、今まででは地域のコミュニティの力が衰えてきたので祭の継承・維持が大変になってきたという考えがありました、そこから発想の転換といいますか、もう一度気合いを入れ直して、祭の力を使ってコミュニティを再生しよう、という発想の可能性。ここで重要なのは、難しいかもしれません、氏地に住んでいて祭に参加していない人をどう巻き込んでいくかという事。無縁地の人たちというのは祭が始まから好きだから文句も言わずに来てくれます、けれども、住んでいる人というのは祭が嫌いな人もいますし、面倒くさいと思う人もいます。しかし、そういう人たちも巻き込んでこそ、本当の意味の祭の実現になるのではないか、と思っております。もちろんその途中の段階で、無縁地から助けてもらうというのは多分に必要になる事もあるとは思います。

地元と隣接地と無縁地とのバランスを上手いことっていく。結局、どちらの選択肢にしても、最終目標を何にするかという事を設定しないといけない。最終目標は、やはり氏地活力更新型の祭ではないでしょうか。今日の前にある、目に見えるもの、それを維持していく事はもちろん大切な事なのですが、それだけでは、10 年後 20 年後、50 年後 100 年後に祭がどうなるのか、地域がどうなるかというのは、ちょっと難しくなってくると思います。このような事を日頃から考えながら、笛を吹いているという次第でございます。

最後に、よろしければこの『日本の祭と神賑』という本を1冊でも多く買っていただきますと幸いです（笑）。御清聴ありがとうございました。

## 第二部 パネルディスカッション 質疑応答

今日はありがとうございました。私の講演は、かなり抽象的な話だったのですが、第二部で具体的に話が深まったと思います。大学生・高校生の子供たち、無縁地の話も出ましたが、その中で、ともすれば悲観的な未来も頭の中をよぎったのですが、やはり最後の谷岡学長のお話にありましたように、祭を学んだ子供たち、祭の心を知った子供たちが、そこを離れても、そのポテンシャルを持っていれば、新たな土地で祭に関わる可能性がある、というのは、その通りだと思います。それを聞いて、未来がかなり明るくなりました。上手い形でまとまつたのではないかと思います、本日はありがとうございました。



森田玲

日本の祭と神賑—京都・摂河泉の祭具から読み解く祈りのかたち

創元社 2015